

## 3 悲しい買ひ物がふえた

大鹿村大河原中学校二年 F・S

あの悪魔のようだった六月。早くも五カ月がすぎ去った。あの思いもしなかつた大西山くずれ。六月二十九日朝九時三十分。忘れもしない、あの時のおどろしい気持が、今じっとしていてもとありありと浮かんでくる。二十八日少し晴れたので田の水を見に行つた。ああ、どの田が最後だとは夢にも想像してもみなかつた。一瞬の間に広々とした三十町歩余りの島河原の水田、大河原の一番の宝が「アツ」とさけぶまに真っ黒なぼろまみれな姿となつて現われた。見るも残酷な姿である。今少し前の青々とした稲が消えてなくなつた。どっかりとすわつてくるくずれ落ちた大西山の岩石が、私の目に強くいじ悪く見える。偉い大勢の人命をうばつた大西山に對し、悪く思わないでほしい。だれが、あんな恐ろしいしかけを作り出したのだらう。今あのことを思い出すとゾッとする。私はくずれおちまいる岩石に目が向けられぬ。三十町歩余りの水田が

河原と成つて石がゴロゴロしまいる。これは、天災だ。人間は手も足も出ないありさまだ。いかに自然の力、天の力というものが恐ろしいか、この災害でありありとわかる。

私の家でも田んぼを全部流し、

「どうやってみ一日一日生活をおぎなつていくかと心配になる。

特に私の家では、土台となるおとうさんがいないので、つても困る。子どもたちの私たちにまで影響する。畑だけの農作物では食べにくい。人間が一番大切な「食べ物」これがなかったら人間は生きにくい。年ごとに増していく品物。お金をはらつて買ひ入れなくてはならない。水からの生活はぜいたくが過ぎない。米一粒だつて大切に扱つかなくては食べられない。私の家でも少しは売つていたのだが……。来年からはどんなに食糧不足でもない。今まで買って食べたりした人たちの寂しい。つらい気持ちをわけて。悲しい買物がふえた。今までだつてどんなに豊かになく、せいぜい生活して来た。ど

水を一段深めた悲しい苦しい毎日がつづく。  
買う時になつてお米の尊さを知つた。苦しい毎日毎日がすぐどこまで来ているように感じる。青木の田を見るたびに、

「田んぼのある人はいいなあ。」「とうらやましい気持ちになる。

「一粒もない。」「なんでも今までにないことだから夢のようで、うそのようで、今だにそういう気になれない。お米さえあればどんなことだつてもできる。明るい豊かな楽しい毎日が続く日はいつくるだろう。」